第7章 ラ・ペルーズの探検航海と宗谷海峡の発見

天明5年の江戸幕府による蝦夷地調査の2年後、フリゲート艦二隻を率いて世界一周のフランス探検隊が宗谷海峡を通過している。

ラ・ペルーズは1782年、英仏戦争の時ハドソン湾遠征隊を指揮し、氷と霧に閉ざされた北洋の危険を冒して、イギリス軍駐とん要地を占領したフランスの勇士だった。

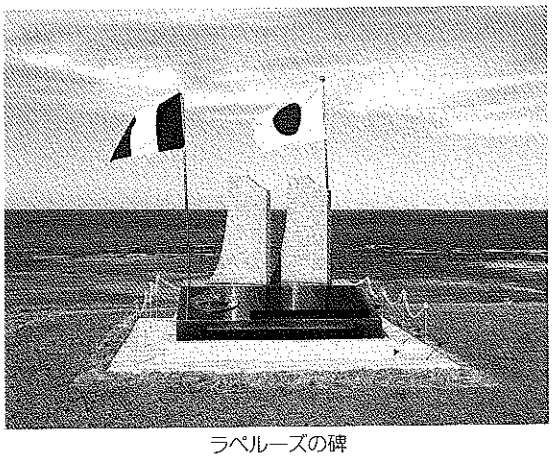
ラ・ペルーズが北辺の地理学上に残した最大の功績は宗谷海峡の発見である。ヨーロッパではこの海峡をラ・ペルーズ海峡と呼んだがこれによってド・フリース以来、地続きとされていた蝦夷本島とカラフトが海によって隔てられていることが、はっきりしたのである。

ラ・ペルーズの探検航海は1787年(天明7年)のことで、まず日本海を沿海州沿いに北に進み、沿海州とカラフトの間を北緯51度付近まで達したが、それから先は濃霧で視界をさえぎられ、航行は不能とみて引き返した。帰途はカラフトの西海岸沿いを南下し、オホーツク海に出た。そして宗谷海峡を発見したのはこの時のことである、外国船の北方地域探検はラ・ペルーズだけでなく、英人ブロートンによるものがある。彼の場合は太平洋から津軽海峡を通って日本海に入りラ・ペルーズ同様、カラフトの西岸を北に進み、ラ・ペルーズよりおよそ13ｋｍ前進したといわれるが、やはり濃霧や激しい海流にはばまれてそれ以上の北上は断念した。つまり、彼も大陸とカラフトを隔てる海峡(つまり後の間宮海峡)を、発見できずに終ったのである。

こうした北域の調査に、ロシアが強い関心を示したのは当然であろう。1804年(文化元年)に、ロシアの使節レザノフが長崎に来た際、これを送ってきたクルーゼンシュテルンがカラフトを調査した事実がある。彼はブロートンとは逆に、日本海から宗谷海峡を東に抜け、オホーツク海を北上してカラフトの東海岸を調査し、さらに北端を確認して西海岸の一部まで調査したという。この調査によってクルーゼンシュテルンは、蝦夷本島ではブロートンが調査し残した石狩湾を明らかにし、カラフト島ではラ・ペルーズやブロートンが未調査の東北部の海岸線を明らかに描き出し、中部千島でも従来の地図では知られなかったいくつかの島を発見した。

三人の探検航海の結果を総合すると、カラフト全島の形をほぼ正確にすることができるはずであるが、クルーゼンシュテルンも黒竜江の河口地域までは到達しなかったので、カラフトが島であるか、それとも半島であるかは、依然として不明であった。この大きな問題を解明したのが、間宮林蔵であることは有名な話である。

ここで付け加えたいのは、ロシアの軍艦ディアナ号の艦長ゴローニンのことである。彼は1811年、千島の南部からアジア大陸のオホーツク沿岸測量のため来航し、根室海峡をはじめクナシリ島を明らかにして、クルーゼンシュテルンの地図を修正した「千島列島地図」を作成した。彼はこの時クナシリ島の南端トマリに上陸して、薪水を補給しようとしたところ、駐在の幕吏に捕えられて松前に送られ、1813年(文化10年)両国の了解が成立して無事釈放された。(宗谷紀行)



ラペルーズの碑

ラ・ペルーズがヨーロッパ人として初めて宗谷海峡を通過してから220年目の2007年10月27日、海峡を見下ろす宗谷岬の高台に日仏の顕彰記念碑設立実行委員会により船の帆をデザインした記念碑が建立された。

碑　文

ラペルーズに
1785年、フランス国王ルイ16世は
世界海洋科学調査航海を命じます。
二隻の艦艇司令官として、ラペルーズ伯爵、
ジヤンーフランソワドガローが
この航海の指揮にあたります。
1787年、日本海探索後、日本海とオホーツク海を結ぶ
海の存在を確認しました。
同年8月、二隻の艦艇と共に、宗谷岬の沖にひろがる
この重要な海峡を渡り切りました。
従って、太平洋に合流する
この航路を通過した最初の欧州人なのです。
1789年、オーストラリア出港後行方不明となり、
この勇敢なる英雄は故郷フランスの地を再び踏む
ことはありませんでした。
この航海者の功績と発見を讃えて
世界海洋界はこの海峡を次のように命名しました。
ラペルーズ海峡